

旭川医大病院ニュース

年頭にあたって

院長からの年賀状
院長 水戸地郎

病院職員の皆様、明けましてお目出とうございます。昨年中は皆様お一人お一人の御協力、御支援によって、我が旭川医科大学附属病院がもの見事に再生、復活することが出来ました。衷心より御礼申し上げます。看護職員の充足、病床稼働率の向上、念願であった救急部の設置、ICUの本格的な稼働など、様々な課題がプラスの方向に始動し始めました。その上、院長室から何時も窓越しに眺め気にかかっていた看護婦宿舎も、一般世間並に個室化の改修工事が行われることも決まり、平成四年の新春に心描いていたことが絵空事でなく実現したことで、一息をつく年末年始を迎えることが出来ました。個々の課題の解決もさることながら、何よりの変化

は、病院内の雰囲気は暖かみと明るさが戻ってきたことでしょう。廊下ですれちがう方々から、笑顔の会釈が交わされる機会が多くなってきたと感ずるのは、院長のひとりよがりばかりではないと思います。欺瞞のない対話、その対話を介してのお互いのコミュニケーションの形成、そして、それぞれに誇りに誇りを持ち、病に悩む患者さんに対応する。病院とはそんな場である。という言葉を、一年の間で再確認することが出来ました。しかし、全てを満足しているわけではありません。課題の解決に院長長として一歩二歩を踏み出しただけで、踏み出すことにより更なる問題を抱え込み、また、その対応を迫られていることも承知しております。再生、だとか、欺瞞

題字は吉岡元病院長
〔編集〕
旭川医科大学医学部附属
病院広報誌編集委員会
委員長
八竹教授 (泌尿器科)

などの言葉で連想するのが私の好きな、というより私の研究課題であるとも思っている、ギリシャ神話の物語です。肝臓は他の臓器には見られない再生、復元力があります。この再生・復元力は既にギリシャ神話のプロメテウスの物語にあります。プロメテウスは、神々に反抗してまで人類に火を与え、その罪として岩山に縛りつけられ、大鷹が彼の肝臓を毎日啄むが、翌朝には元の大きさに戻り、一千年にわたり生きながらえた、というものです。肝再生の現象のみならず、神々に逆らってまで人類の為に尽くすというヒューマニズムが、医療に携わる人々の心の原点であると思うからです。

の中には、人間を苦しめるありとあらゆる悪、病氣、欺瞞、嫉みが閉じ込められていたものを、エビメテウスはその蓋を開け、あらゆる悪が人間の世界に飛び散ります。慌てたパンドラが蓋を閉めると、中から「私も外に出して下さい」と呼ぶ。皆さん新年おめでとうございませう。毎年正月は改まった新鮮な気分になり、大小はともあれ、「今年こそは！」と新しい計画と実現への意欲が湧いてくるものです。たとえその一部あるいは大半は夢に終わったとしても、その意欲があるからこそ人類の文化と文明は進歩して来たのです。

一九九三年を迎えて 救急部長 竹光義治

昨年、先ず第一の計画だった病床稼働率の向上は、水戸院長の強力な指導力と、第一にナース諸君を始め大学職員全員の打って一丸となった協力の成果で達成されました。まずはご同慶の至り、この勢いは流れに乗ってぜひ続けたいものです。さて、昨年末から本院では救急部が認可され動き出しました。救急室から昇格した形ですが、助教一、ナース七、放射線技師一が増員され、ハード面での予算もついて第三次救急医療

ぶ声がし、その声の主は希望であった、ということですが。こうして希望が最後まで人間のそばに残り、私共にも勇気と力を与えることになりました。神話の一節を借り、平成五年が皆様方に希望の年であることを祈り上げます。この体制が強化されました。これは政府が世論の要望に応えた結果でもあるのですが、救急はもとも医療の原点です。地域医療の一環として高度先進医療を担い、期待に応えねばなりません。本院では将来の発展をにらんで当分ICUを含め運営することにしていきます。どうか救急患者さんがスムーズに診療を受けられますよう、関係者の皆さんよろしくご協力下さい。本院では、救急部は大学という立場から研修医、医学士、ナースと看護学生諸君の教育と研究のために有効に利用していく必要があります。教育スタッフには大変ですが、本学の将来を考え、ぜひ大きなプラスになるようご協力を願ってやみません。救急部には内科系・外科系からそれぞれ一人ずつ、助手以上の当直が配置されました。外科系はICU、内科系は救急室のブライマリーをみて頂くことになり、最初の段階で戸惑うことも多いと思いますが、皆さんの総意で改善していくことにしますので、よろしくご協力をお願いします。次に、旭川医大病院附属病院が出来た十六年たち、教育出身の教授も生まれ、教育スタッフも増えたので、そろそろ研修システムをストレートコースだけでなく、セミローテーションにすることを計画してみてもいいでしょう。諸外国ではローテーションが当然のことで、幅広く実力のある医師を育てるために研修指導への努力と協力が必要と考えます。話が飛びますが、大学病院として次にぜひ実現してほしいのは、リハビリテーション部への昇格と整備です。患者は外傷や病気の治療をしただけでは、すぐに仕事はできません。社会に復帰して初めて治したと言えます。リハビリテーションへの期待は大きいものです。ぜひ部への昇格を実現して欲しいと願っています。我々の大切な旭川医大病院の充実と発展への道は、稼働率向上で示されたようなソフトな頭と、全員が前向きに取り組む力、そして温かい協力以外なさそうです。では本年も皆さんのご健勝とご活躍を祈っています。

夜間消防訓練実施される

去る十一月十二日、夜間

消防訓練が実施されました。

これは、「平成四年秋季全国火災予防運動」の重点目標のなかで、病院等自力避難が困難な者が多数入院している施設における防火安全対策、とりわけ夜間における防火管理体制の整備が挙げられていること、また、週休二日制の実施による勤務時間外の防火管理体制の徹底強化が求められていることから、実施されたものであります。

当日は、旭川南消防署から十一名の署員と消防車両二台の派遣協力を得、午後七時から訓練を開始しました。

訓練は、病院六階東棟において火災が発生したと



▶初期消火訓練

の想定のもとに、その時間

帯に病院に勤務している職員、看護婦宿舎に同居している職員、自宅から駆けつけてくる職員、患者役の職員等約百四十名が、本学の防火管理規程に基づき通報・連絡、初期消火、避難誘導等の訓練を、一連の流れの中でそれぞれ役割を的確にこなし、訓練に立ち会った消防署からは「全体的には非常に冷静で的確な訓練が実施された」との評価を受けました。

また、今回の訓練では、消防庁からの「社会福祉施設・病院における夜間の防火管理体制指導マニュアル」に基づき、訓練時間の計測を実施しました。結果は、設定された限界時間内に全



▶担送訓練

自衛消防隊本部



の行動を終了し、当初の目標を達成しました。

しかし、訓練進行上の手違いから、初動開始の遅れ、避難誘導の際のリーダーの不在等が起こり、行動要領の見直し・改善について、今後関係部署等と検討していくこととなりました。

火災予防は、今、身の廻りから

本院では、開院以来、幸いにして火災等の重大な事故は一度も発生しておりません。また、本院の建物は防火・消防設備が整備されており、個々の職員がその装置・設備の働きと動きを熟知して落ち着いて行動すれば、被害を最小限に防ぐことが出来るようになって

います。今回、訓練終了後の消防署からの話の中で、最近一

講評



本学の永年勤続者表彰式が、勤労感謝の日を前にした去る十一月十九日(木)午後四時三十分から、部長及び所属長の列席のもと第一会議室において行われました。

永年勤続者表彰

会議室において祝賀会が開催され、永年にわたる思い出話に和やかな懇談のひとつを過ごしました。

表彰式は、国又は地方公共団体の職員として二十年以上(うち本学に十年以上在職)の永きにわたり勤続し、職務に精励された被表彰者八名に、清水学長から、表彰状と記念品(銀杯)が贈られました。

次いで、学長からお祝いの言葉が述べられ、これに對して被表彰者を代表して、上田俊幸氏(業務部医事課医事係長)から謝辞が述べられました。

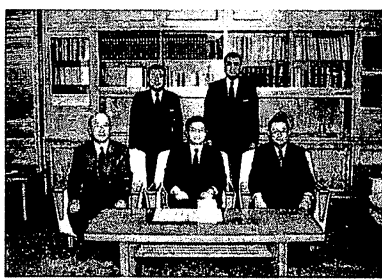
- 安濃 英治 (物理学)
- 上田 俊幸 (医事課)
- 川堀 眞一 (耳鼻咽喉科)
- 佐藤 仁 (庶務課)
- 中村 時子 (看護部)
- 原 里子 (看護部)
- 平山 隆三 (整形外科)
- 細川 博道 (検査部)

また、併せて、文部省の永年勤続者表彰を受けられた業務部医事課長 伊藤征男氏に、学長室で学長から、文部大臣表彰状及び記念品が伝達されました。

(庶務課職員係)



▶本学永年勤続者表彰式



▶文部省永年勤続者表彰伝達式

いま、氣になる病氣 話題の病氣②

C型肝炎

第二内科編

れていますが、不明のものも少なくありません。

【はじめに】一九八八年、米国カイロン社により非A非B型肝炎の原因ウイルスの遺伝子構造が解明され、C型肝炎ウイルス(HCV)と命名されました。さらに、HCV遺伝子の非構造領域の発現蛋白に対する抗体HCV抗体)のアッセイ系を確立し、今まで非A非B型といわれていたものも多くがC型肝炎であることが明らかとなりました。

日本人のHCVのキャリア率は約1.2~1.6%とされ、若年者に低く高齢者に高いことが特徴的です。HCVはB型肝炎ウイルス(HBV)と異なり、成人の初感染でも50%がキャリア化した慢性肝炎に移行します。さらに、緩徐ではありますがいまだに悪化し、一部の症例は肝硬変・肝癌へと進展していきます。

【感染経路】HCVは血液を介する感染であり、輸血によるものが約40%とされ、残りの経路としては医療行為、薬物乱用、刺青、性行為、母児感染などが考えら

【診断】HCVは血中に極めて微量にしか存在しないため、ウイルス本体の存在を示す抗原測定系の開発はまだなされていません。当院で現在用いられているHCV-IIは、HCV遺伝子のコア領域と非構造領域の発現蛋白を抗原とする抗体のアッセイ系であり、検出感度・特異性ともに第一世代のHCV抗体に比し有意に優れた第二世代のHCV抗体です。

また、ウイルスの微量な核酸でも増幅可能なPCR法を用いてHCV-RNAを検出する方法は、HCV本体の直接的な同定法であり、C型急性肝炎の診断やC型慢性肝炎の治療効果の判定に有用と考えられます。最近HCVの定量法が開発され、さらに少なくとも四つの亜型があることも判明し、病態の進展や治療効果の面から注目されています。

【治療】インターフェロン(IFN)は抗ウイルス剤であり、HCVを減少・撲滅させ肝障害を改善させる

原因療法として大変期待されています。IFNには α 、 β 、 γ の三種あり、 α 、 β がウイルス肝炎の治療に用いられています。 α は主に筋注で、 β は静注で投与されています。現在主に用いられている投与方法は、①間欠投与(3~6MU/日・2連日投与・週3回6ヶ月)、②連日投与(3~6MU/日・4~8週)、③連日10日間投与(3~6MU/日・2~4週連日10週3回14週以上)などがあります。

効果判定は厚生省「難治性の肝炎調査研究班治療分科会」の基準(表)に従って行われ、著効群の中にはウイルスの消失(HCV-RNAの持続陰性化)を伴う完全治癒例が多く含まれ

表 C型慢性肝炎に対するIFN療法の効果判定基準

1) 著効	投与終了後、6カ月以内にGPTが正常化した例、その後6カ月以上、正常値が持続した例。
2) 有効	投与終了後、6カ月以内にGPTが正常上限値の2倍以下に改善し、その後6カ月以上正常上限値の2倍以下を保持した例。
3) 悪化	投与終了後、6カ月間にGPTが明らかに増悪した例。
4) 不変	投与終了後、6カ月間にGPTが1~3)に属さない例。

ていると考えられます。現在のところ、著効と有効を合わせると50%近い有効率が得られています。

C型慢性肝炎のIFN療法の治療効果に影響を与える因子として、宿主側には罹病期間、肝病変の進展度、HCVの亜型がありま

す。すなわち、罹病期間が短く肝病変が軽度なものは、またHCV量が少なく、亜型のうちIII型のものが、有効率が高いとされています。

IFN治療抵抗例には、投与量や投与期間を工夫したり、他剤との併用療法も考えられています。

IFNの副作用として、初期には発熱、悪寒、関節痛、全身倦怠感などのインフルエンザ症状や、白血球及び血小板の減少などがみられます。遅発性の副作用として、うつ病、自己免疫性甲状腺炎、心筋炎、間質性肺炎の報告もあり、注意深い観察が必要です。また、IFN- α 投与例には脱毛がみられますが、投与終了後には回復します。

【予防】HBVではγグロブリンやワクチンが実用化され、垂直感染や水平感染の予防に効果を上げていますが、HCVでは中和抗体を含むγグロブリンやワクチンはまだ開発されていません。医療機関におけるHC

【治療】インターフェロン(IFN)は抗ウイルス剤であり、HCVを減少・撲滅させ肝障害を改善させる

Vの感染予防対策は、基本的にはHBVの感染予防対策をあてはめてよいと考えられています。HCVはHBVに比し血中濃度が低い

ため、汚染された注射針の誤刺などによる感染率は低いとされていますが、汚染事故から急性肝炎を発症し慢性化した報告例もあり、十分な注意が必要でも

当院では昨年十月から、HCV感染予防のためIFNの単回投与が施行される

輪血部発 ①

Who are the conqueror of AIDS

The conqueror of AIDSとは一〇六六年英国を征服した征服王、ノルマンジー公ウイリアム一世をさす。その響きには威厳と敬服の念がこめられている。

一九八八年、アメリカはキューバの独立運動をめぐってスペインと交戦した。ベトナム戦争以外敗戦を知らない米軍は当然のように勝利するが、とんでもない落とし穴があった。黄熱病、十九世紀後半アメリカ全土で七万四千人が感染し、一万六千人が死

亡したといわれている。これがババナに駐留していたアメリカ軍に蔓延し、敗戦国スペインの戦死者を上回る米兵がこの病に倒れた。時の国防長官は、この感染症を説明するためにウォルター・リードを隊長とする四人の委員を任命した。

絵は二十世紀初頭米国の画家Dean Cornwellのもの。『Conqueror of Yellow Fever』と題されている。中央、立っているのがウォルター・リード、腕を出しているのがジエームズ・キヤロル、その腕に何やらしているのがレッセ・レザールである。この三人は例の委員会の委員で、今レザールは当時黄熱病の病原体を運ぶものが「蚊」であるという噂を確かめるためにキヤロルの腕を蚊に食わせる実験をしている。この二人

ことになりました。注射針やメスによる汚染事故が発生したら、直ちに水洗・消毒し、専門医を受診するようにして下さい。

(第二内科 講師 秋山建兒)



は自ら志願者となつて病原体の感染源を確かめるために数々の実験を行い、ついには黄熱病が蚊によつて感染する事、蚊の駆除によつて黄熱病が克服できる事を証明したのである。レザールは実験中、黄熱病によつて命を落とすが、後世彼らの行為は『第一級の勇氣』と讃えられている。

エイズは全世界で数十万人もの患者が発生しており、その背後には五十倍から百倍の感染者がいると言われている。アメリカ合衆国ではウイルスの感染者が国民の七十五人に一人、今世紀中に治療薬が開発されない限り彼らには確実な死が待っているという危機的状況にある。我が国でも研究班の発表によれば、平成四年八月現在で、累積患者が四



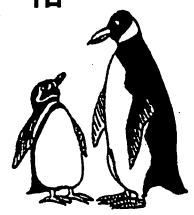
百九十七人、届けられた感染者数が二千三百六十九人、凝固因子製剤以外による感染者の実数はおよそ三千人にのぼると言われている。血液事業対策によつて凝固因子製剤による新規の血友病患者の感染者は今後増加しないが、セックスによる蔓延は避けられない。

昨年十二月から道内の保健所でエイズの匿名検査が始まった。エイズの蔓延を防ぐには感染の実態調査と感染者に対するカウンセリングが必要不可欠であるが、実際にどうしたらよいものが暗中模索が実情である。エイズの問題は厚生行政に任せよう、と言つて避けられる問題ではない。公的医療機関の役割として積極的に参加すべきで、このためがあると考える。統計によれば、エイズ感染者の採血における針刺事故での感染は〇・三〜〇・四%と低く、汚染血液の付着による感染率はさらにその十分の一と言われている。ただしこの確率が〇でない以上十分な配慮が必要であろう。特に患者の血液との接触の機会が多いセクションでは、HIV 抗体測定を義務付け



シリーズ 南極四〇〇日

長谷川 裕



3

平成三年七月十七日、五十三日より太陽が昇った。二時間の太陽との対面は、この日の夕食時間の一番の話題であつた事は言うまでもない。

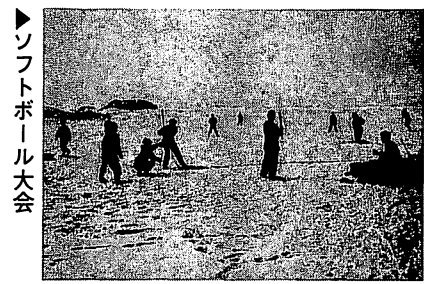
「越冬後半の基地生活」

越冬も半分を過ぎると、各人の生活形態がパターン化し、何処で何をしているか手に取るように分かる。基地内にある七つの各観測棟を渡り歩くわけでもなく、決まつた所でそれぞれにあつた行動をしているのである。特に六月から九月までは、来年の三十三次隊の物

のような配慮も必要ではないかと思う。事実を知る勇気が要求されている。

いづれにせよ、エイズは今世紀最大の医療課題である。その克服にはありとあらゆる努力が払われるべきであるが、同時にすべての人に Conqueror となるチャンスがある。

(副部長 山本 哲)



「盛んな観測活動」
世界気象機関(WMO)から正式に地上観測通報局として認められている昭和基地の気象データは、地球全体の気象予測をするのに欠かせない観測ポイントとなつている。三年連続のオゾンホール出現を確認したのも昭和基地である。気象隊員四名は、南極の気象状況を二十四時間体制で観測している。地味ながら重要な観測である。

昭和基地は、大陸周辺の海洋上の島であるため、内

資調達の参考資料をフアクシミリで送るため、時間さえあればワープロに向かつているのが現状だ。

この気温の中、野外観測に出る隊員もいる。海氷海洋観測の二名の隊員は、海氷上を基地から五十 km 沖合の地点まで進んで観測を行つていた。海の上を五十キロ口進めるのも南極特有の気候だからできるのであろう。一週間ほど観測支援で同行したが、氷厚 3m のボーリングの困難さ、扱ひ物が海氷コアとあつて衣類が全部濡れてしまうことに閉口した。一日の調査が終わつてカブース(幌で覆つた櫓)や雪上車の中で衣類を乾かすが、熱源が乏しく、半乾きのまま翌日また着る。最初の一分間我慢できれば、何とかなる。寝るのは氷点

があり、どの隊員も張りきつて参加していた。

陸や他の基地に比べ暖かい。最低気温マイナス三十八℃、夏は最高プラス六℃。七月八月は連日というよりは二十四時間マイナス三十℃以下の日が続いた。



◀気象観測

▶海水海洋調査隊と夕焼け



「ドーム計画」
「しらせ」が出航準備で大忙しの十月、「ドーム計画」の初年度作業が行われた。「ドーム計画」とは、一万年以上も前に

下の雪上車、食事はカプラーの中、水は豊富にある雪を解かして使う。こんな生活を延べ六十日間も繰り返した二人に敬服する。
他にもたぐさんの観測があった。衛星がとらえた地球の姿のデータ受信、あるいは電磁波の受信、オーロラ観測、クレバスレーダの開発、飛行機を使ったエアサンプリングと地形測量などを、わずか十七名の観測者で行っているのである。

「何でも屋・設営班」
我々設営班の十四名は、観測者だけでは人手不足の時、支援に出向くことがある。基地に閉じ込められた生活だけでなく、野外キャン

プを通じて知らなかった数々の体験を行うことが出来るのである。
同行する以上は、雪上車の修理、無線操作、キャンプの方法などを一応習得していく。観測に出て雪上車が動かぬということ、自分の生命にかかわるからである。コックさんであるが、一人しかいないドクターであろうが、雪上車の下にもぐって修理の講習を受ける。現に、雪上車の燃料タンク凍結やバッテリー線の断線などがあつたが、いずれも同行した設営班が修理し、無事帰還している。また、往路ではなかったクレーバスが復路で見え、レスキュー隊の出動による歩み板をわたつての帰還を観測中一瞬の内に燃え尽きたカプラーの焼失など、南極での行動が危険とは紙一重なこと、そして設営班の役割の重さを痛感させられた。

降り積もつた雪を三千mポリングして地球の過去を探ろうとする調査である。実際には、基地から千二百km離れたところにドーム基地と言われる掘削所を造るのだが、その中継拠点の内陸六百km地点まで燃料を運ぶのである。
三百六十本もの大量の燃料ドラム缶を輸送するのに、前期隊と後期隊に分かれ計九名が参加することとなった。運良く、私も後期隊に参加することが出来た。予想も付かない異常低温による車両トラブル対策、ルート開拓、食糧計画、燃料積込みなど、出発まで二ヶ月の準備作業となつた。
十月十三日、前期隊の五人が元気に出発した。予定では四十日後に帰還するが、リーダーだけは途中のみずほ基地で交代する後期隊の先導もするため、帰還は六十日後になる。もちろん、この間風呂なしの生活だ。
前期隊は、基地を出発してから十九日でドーム中継拠点に到達した。マイナス五十七℃、雪上車トラブル、時速五キロ、機体の破損、高山病などと悪条件続きの情報が入る。
「極寒」を体験したい。ただそれだけでこの内陸旅行に引きつけられる。

「みずほ基地」
十一月十日、後期隊四名が雪上車二台と燃料機を牽いて出発した。
基地から三百キロの、今は無人の「みずほ基地」に三日で着いた。ここまでは何も問題なく順調に来ることが出来た。ただひとつ、四人とも三千mの高所による頭痛を訴えていた。軽い高山病だろう、二三日後には忘れていた。(気圧が日本より二十ミリバール低いため五〜六百mぐらいの高度差がある)
ここで前期隊と交代するのだが、無線でまだ百五十キロ先にいることが分かつた。二日はかかる。
さつそく、雪面下の基地

探検となつた。マイナス三十四℃の気温計が、無人の基地をいつそう寂しく語つて入つてきて一面紫色で染めた紫御殿。五センチはあつた雪の結晶。白くならない吐息。(大気中に不純物があると、吐いた息の水蒸気が着き白く見えるが、この大気は汚れていない。)
何もかも南極だ、十一月十四日、真っ黒に日焼けした前期隊五名と再会。握手、握手。握る手が何だかギトギトと油っぽいのに気がつく。口々に「風呂呂に入りたい」を連発している。
その晩、九名全員で会食し、前期隊の苦勞話に聞き入る。明日はわが身だ。

職員スキー同好会
シーズン到来ということ、スキー同好会の紹介の番となりました。会員の大半は他の運動系同好会にも所属しており、夏場も来るべきシーズンに向けて(？)トレーニングに励んでおります。同好会としてのスタートは、開学後間もなくで

会の具体的な活動は、シーズン当初の「講習会」から始まり、「深雪ツアー」「一泊ツアー」「ゲレンデツアー」「焼肉ツアー」「ピデオ鑑賞会(納会を兼)」そして、年度が変わつた四月の「春山ツアー」でシーズン終了となります。その他、有志によるニセコ方面へのツアーも行われております。何分、シーズンが短いので、月間・週間の天気予報を参考にしながらツアー期日を設定するのが難しいところ。

交代した雪上車四台を念入りに整備し機をつなぐ。
十八日、前期隊は昭和基地へ、我々後期隊は「極寒」を求めて内陸へ。(つづく)



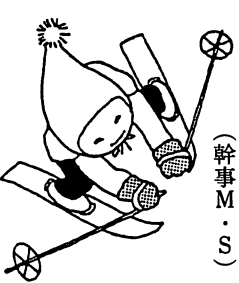
◀みずほ基地 (標高二、二三〇m)



▶ 深雪に悪戦苦闘

各ツアーは、「車」乗り合わせで行動。楽しみなお昼は、午後からのスベリを「より華麗に」「よりダイナミックに」と、運転担当の冷たい視線を無視して、毎度軽々しくビール又はワインで乾杯。勢いづいて、そのままドップリウェスキーとなる愛すべき同輩も、数人は。又、各ツアー毎にビデオ撮影をし、納会時にそのフォーム等を鑑賞することとしております。被写体になるのが嫌なのか、カメラマン志望者が多いのが悩み。編集等一切無しので、そのままビデオですの、鑑賞会では言い訳が多くなり、為に咽がカラカラ、ついつい深雪へと納会お決まりのコースと相成るのであります。

会員の大半が目指すところと言えば「深雪」となるわけですが、なかなか適当なスキー場がなく、一練のニカルへと積極的にチャレンジし検定合格を目指している会員もいます。スベリは明らかに上級クラス、フォームのちよつとした癖さえ直せばと指摘されるも、頑なにその癖を固持している個性派スキーヤーも中には……。



(幹事 M・S)

今シーズンの「一泊ツアー」は、〇〇スキー場を予定していますが、新(深)雪に恵まれるかどうか、この数シーズンの降雪不足を



◀ ニセコにて(後方は羊蹄山)

情報を頼りに漸く見つけた絶好の「穴場」も、今流行のスノーボード派に侵略され(？)、共存の難しさを痛感、痛感。一方ゲレンデにあつて、一級そしてテクニカルへと積極的にチャレンジし検定合格を目指している会員もいます。スベリは明らかに上級クラス、フォームのちよつとした癖さえ直せばと指摘されるも、頑なにその癖を固持している個性派スキーヤーも中には……。

考える心心配です。なお、スノーボード派に知られたくないため〇〇は会員にのみ後日お知らせします。(ちよつとセコイですかネ) 昨シーズン は、特別企画として、医大 宿舎町内会の スキー遠足に 参加、講習会 及びゲームのお手伝いをさせていただきました。今後

かしわ林

今年の夏は帯広の坂本直行記念館に出かけた。坂本直行さんとはどんな方かよく知らないまま、ただ、周囲が広大なかしわの原野であるとの言葉に引かれたからである。

かしわの木については忘れられない思い出がある。北海道に赴任した日は、猛烈な吹雪のため飛行機が大幅に遅れ、ホテルもなく、第一夜を友人宅に泊めてもらった。彼は千歳近郊で農業に従事している中学時代の親友であるが、彼がこんな話をしてくれた。子供が「春になると、山道の落葉を踏みしめながらどこそこへ行ったが・・・云々」と自作の作文を朗読すると、先生は即座に「落葉は秋でしよう。その文章はちよつとおかしいですよ。」とやさしく訂正したとのことである。友人は「その先生は恐らく本州で育つた方だったのでしよう。北海道では春にかしわの枯葉が落ちるのです。確かに落葉といえ

は春」でおかしくないですね。」と話してくれた。その話は、私にはとても印象深く、以来、スキー場や公園の雑木林などで、真っ白な雪の中で枯葉がしつかりと木梢に付着しているのを見て、ある土地で当然のことが別の土地ではその逆とは：と、彼の言葉を思い出しながら感心したものである。

坂本直行さんは、北大出身者ならご存知だろうが、私にははじめて聞く名前であった。彼は画文集の中で次のように述べている。「潤葉樹のほとんどは紅葉が終るといつべんに葉をふるは落してしまふが、柏だけは異例であつて、はじめて原野で冬を迎えた時は、雪が積もつてもまだ枯葉をつけたままの柏の木を見て、ひどく興味をおぼえた。」

また「雪原と明るい褐色の柏林を前景として、冬の日高連峰を描いた絵を札幌の友人に見せたら、『何だこれは！雪景色に紅葉なんてあるかい！』と文句をいわれたことがあつたけれども、こんな風景を見たことのない人にとつては、さもありなんとと思う・・・云々」と、友人の話と全く同じことが書かれてあり、記念館周囲の柏の原野の冬景色を想像しながら、感慨を新たにしました。

自然界には、ハッと驚かされる営みがたくさんあり、このかしわ林のように、たとえ我々に身近なことでも意識に上らないままなんとなくに見過してしまっている場合が多いと思われる。これは自然界に限らず、我々の医療でも同じことが言えるだろう。日常の診療の中で、案外病態の真の姿は、見えていないように見えてなく、心の片隅に一寸した懸念を残しながら、忙しさにまぎれそのまま処理してしまふ場合がある。そのような皮相的でパターン化した診療から、大部分の誤診が生じてくる。それに対し、経験豊富な方々や専門家の見方は、つばを外さずさすがであり、つばを外さずさすがの見方をしていく我々の目を、はつと見開かせてくれるきっかけとなることが多い。

我々医療者は、日頃の知識の積み重ねの中で、本当にそうか？といつも己に問い続け、より深く観察する姿勢を持ち続けながら、同時に別の視点からの見方も積極的に取り入れる柔軟さが必要であろう。



(脳神経外科 助教授 大神正一郎)